
魔王と勇者

うめひじき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者

【コード】

N5926U

【作者名】

つめひじき

【あらすじ】

短編。勇者が魔王と対峙する。しかし、魔王の本当の思惑は…。

ついにここまで来た。目の前には、憎き敵の魔王がいる。剣の柄をさらに強く握る。仲間も家族もみんな、魔王とその手先に殺された。殺された人間の為にも、世界の平和の為にも、私は魔王を倒す。倒さねばならない。必ず、この手で。

「勝負だ、魔王！」

「待て。……ひとつ、いいか」

魔王は静かに口を開いた。私は思わず身構えた。何かの作戦か？あるいは奴の能力か？耳を傾けると、何かが起こるのか？魔王が何かアクションを起こすだけで、私は殺しきれない恐怖を覚える。こんな人間が、果たして魔王を倒すことができるのだろうか？

「身構えなくてもよい。ただ、お前と話がしたい」

「私はお前と話することなどない！」

「聞いてくれ。お前には聞く権利がある。生き残った戦士よ」

「……？」

恐ろしいほど、哀しい目をしていた。私は口を閉じて、その目を見つめた。

「私は……これまで幾つもの命を奪った。その命を自らに取り込むことにより、その分だけ生き長らえ、今ここにいる。私はその者達

の記憶を共有することができる」

魔王はゆっくりと、しつかりとした口調で語る。私の鼓膜を確かに震わせる。目の前に存在するこの大男は、本当に魔王なのか？ そう思わせるほどに敵意や殺意を感じず、ただの人間にさえ見えた。

「私も元は人間だった。だが、私は人間ではなかった。異常で異様な能力を持って生まれ、人が肉を食うように、私は人の魂を食う。最初は幼い頃の友だった。やけに腹が空いて、その友を食った」

……やはり、魔王は魔王だ。人間を食う悪魔なのだ。元人間だというのは初めて聞いたが、中身は悪魔。許すわけにはいかない悪魔なのだ。

「後は、後悔しかなかった。なぜ私は人を食ったのか？ 幼いながらにして、そんな気持ちにさいなまれた」

「……だからどうしたというのだ！ だから許せと言っのか！」

「聞け。私は結局その後も人を食った。だから私は許されるわけにはいかない、己を許すわけにもいかない。最初に言ったとおり、私は記憶を共有する。喰った命の分まで生きる。私の中で、喰われた魂は生きているのだ。だから、私は生きる。生かされている」

何が、言いたい。私は混乱し、訳が分からなくなった。魔王の中で、喰われた魂は生きている？ ここには在らず姿は見えないが、そこに生きているというのか？

「私は思った。私の中で私以外が生きられる能力を持つのなら、私の中で私以外が住める世界を作れないか、と」

どういうことだ。魔王の中に、魂が生きる世界ができた？ つま
り、肉体を必要としない、魂のみで生きる世界が生まれたのか？
この現実世界ではない、全く別の空間で、そんな世界が？

「魂のみなら形がなくて可哀想だと思い、器として肉体も貸してい
る。私の中では私が神であるから可能なのだ。私の中にこの現実世
界のような、もう一つの世界がある。信じられないだろうが、お前
の家族や仲間も、別の形で生きている。その者達の記憶は私が保管
しているし、貸した肉体が何らかの形で滅んでも、また別の器に移
し転生させている」

「馬鹿な……そんなことが可能なわけが……」

「可能だ。私が喰った魂は、私の世界で生きている。……ほら、お
前の母親だった者が笑ったぞ。もっとも、今は5歳の娘の姿をして
いるが」

虚脱感に襲われ、私は床に膝をついた。うなだれ、手をつき、床
を見る。ただの石畳。魔王の城の中の、何の変哲もない石畳だ。こ
れと同じようなものが、魔王の中にもあるのか。俺の母にも、父に
も見えるのか。私のように、生きているのか……。

「魔王よ……」

「信じたのか？ 魔王である私の言葉を。ただ、私は真実以外を語
ってはいない。確かに、私の中に何億もの命がある。これは真実だ」

「信じよう。お前の言ったことを。なぜだか私は今、救われたよう
な気持ちでいる」

「戦士よ。お前が今ここで死して朽ちようとも、私の中に生きる」ととなる。しかし、私が死して朽ちる時……」

「言つな。私には私の……使命がある」

「……ならばもう何も言うまい。私はこの現実世界の悪魔や魔獣以外の命を喰らい尽くすつもりだ。全てを吸い込み腹に収める力も、私には備わっている。私は神になる」

そうか、お前は全ての神になるつもりか。魔王の腹の中の世界は、魔王が神なのだから、そういうことになる。

「……魔王、私もひとつ」

「なんだ」

「この現実世界は、極めて熾烈だ。人間は虐げられ、悪魔に統括されている。そんな悪魔を束ねたのがお前だろう？ 私はお前を悪魔だと思っていた。だが違った。つまり、お前は悪魔でさえ喰らい、魂を取り込めるんだな？ だから悪魔がお前を恐れ、下についた」

「ああ、そうだ。だから私の中にも悪魔がいる。お前の母親が住まう世界とは別に、業を背負う魂を閉じ込める世界をつくり、そこに住まわせている。悪魔は凶暴だ、私の世界をめちゃくちやにされては困る」

確信した。

「魔王、お前は……」

「分かったか。悪魔に統括されたこの荒れ果てた世界では、未熟で弱い人間が生き残ることは不可能。だから私は、この能力、力を使って、別の世界へ非難させるといった方法をとった。これが私の精一杯の償いだ。悪魔に殺された魂も、私が全て喰った」

「……」

床に転がる剣を見つめた。これは、果たしてこの世界を救う剣なのか？ 魔王が作り上げた、悪魔に支配されない平和な世界を壊す剣ではないのか？ 私が魔王を倒せば、どうなる？ 魔王が束ねた悪魔は魔境に帰るかもしれない。だが、また別な場所から新たな悪魔や魔獣らがやってくるかもしれない。私は何を救い、何を守ることができる？ 私は魔王と違い、長くは生きられない。死した後、この現実世界はどうなるのだ？ そこを狙って悪魔が再来したら？ 私は深く考えこんだ。

沈黙が続く。魔王は腕を組み、私を見下ろしている。私が魔王にひれ伏しているような形になっている。しかし、実際そうなのかもしれない。私には安全な世界を作り出す力はないし、平和を守り続ける力もない。魔王に勝つ為に力をつけても、それには遠く及ばない。しかし魔王は悪魔さえ使い魂を集め、人間を安全な世界に移住させている。やり方は残酷であるかもしれないが、仕方がないと感じてしまう。悪魔は人間を引きちぎり、噛み砕き、恐怖を与える。魔王の世界は、その永遠の脅威から解放された世界だ。その世界の神が目の前にいるのだから、私はひれ伏してしまっているのかもしれない。

「魔王」

「なんだ」

「誓ってくれないか。お前の中の魂、いや、人間達を、悪魔などという脅威にさらさないと」

「無論だ」

「……………ありがとう」

剣をとった。自分に切っ先を向ける形で。

「戦士よ……………」

「魔王。お前は悪魔達を統括したが、それでもこの世界の脅威は拭えない、そう感じたからその方法をとったのだな？」

「ああ、それも大きな要因のひとつだ。私がいくらこの世界を統べようと、全てを操れはしない。必ず人間は様々な場所で悪魔や魔獣らに殺される」

「人間を喰うのは、人間の為」

「ああ。この能力はこの為にあると気付いた。私の中の世界では、悪魔らにそんなことはさせない」

「最後に……………ひとつ」

「なんだ」

「なぜ人間の魂だけを喰わない？」

「それは……」

魔王の口の端が、大きくつり上がった。

「腹が空くからだよ」

(後書き)

私達の住む世界が、もしも魔王の腹の中なら。考えただけでブルーです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5926u/>

魔王と勇者

2011年10月9日10時27分発行